



たけ かわ ひで ゆき
竹川英幸さん

(大阪中国帰国者センター理事長)



壮絶な半生を乗り越え、 帰国者支援に情熱を注ぐ

全国モデルにもなった支援策の数々

大阪中国帰国者センターの理事長として、これまでに2千人をゆうに越える中国残留孤児とその家族を支援してきた竹川英幸さん。20歳以上の子どもをはじめ、国費の対象外である帰国者の受け入れや帰国後1年間の生活保護、府営住宅への優先入居など画期的な支援策を次々と実現させ、全国的なモデルとなった。個人的に帰国者支援を始めた1976（昭和51）年当時、まだ行政にも帰国者支援の担当窓口はなかった。そんな状況のなか、古本や不用品バザーなどで1千万円を集め、日本で初めて民間のセンターを立ち上げたのである。その並外れた情熱と行動力の背景には、竹川さん自身の残留孤児としての壮絶な人生がある。

戸籍のない祖国で味わった絶望

4歳だった1937（昭和12）年、両親とともに満州へ。終戦で日本へ引き揚げる途中に襲われ、頭を殴られ気を失ってしまう。父親は出征しており、幼い弟妹5人を抱えた母親は呼びかけに反応しない竹川さんを置いていくしかなかった。通りかかった韓国人夫妻に助けられてソウルで育つが、朝鮮戦争の空襲で養父母は死亡。17歳になった竹川さんは韓国軍に招集され、手榴弾攻撃を受けるなど幾度も死と直面しながら生き延びた。

1958（昭和33）年、25歳で除隊し日本へ。「一時帰国のつもりだったのですが、アクシデントで帰りの船に間に合わず、そのまま日本に住むことになりました」。しかし戸籍のない竹川さんには肉体労働しかなかった。仕事ぶりを認められ、正社員にと誘われても身上書が書けない。言葉のなまりから長野県が出身地らしいとわかり、

長野県内の飯場を渡り歩きながら肉親を探したがわからない。絶望して2度、自殺を図った。

さまざまな苦難を乗り越えながら結婚、3人の子どもに恵まれた。水道工事の仕事が軌道に乗り、はた目には充実した生活だったが、戸籍のないことが心に重くのしかかっていた。

42歳で戸籍を取り戻し、帰国者支援を始める

そんな時、残留孤児の肉親捜しに取り組む長野県の長岳寺住職、山本慈昭さんを知る。連絡をとって1ヵ月後には両親が判明、3人の弟妹とともに両親も健在であることがわかった。再会の前日、祝いの席で「自分ほど大変な人生を送った人間はいない」と話した竹川さんを住職は「ばか者！」と一喝した。「確かにおまえは大変な思いをしたが、5歳までは親きょうだいと暮らし、明日は再会を果たせる。しかし生まれた直後に置き去りにされ、今なお日本に帰れない人がたくさんいる。自分だけが大変だと思ふな」。住職はせつせつと説き、「だからこそ、今度はおまえがみんなの力になってくれないか」と語りかけた。

「それまで自分のことしか考えてこなかったけれど、ハッと目が覚めました」と竹川さんは微笑む。42歳で肉親と再会を果たし、戸籍を取り戻した後は、借金を背負いながら帰国者支援に力を注いだ。中国での小学校建設にも取り組み、6校が開校した。「終戦の混乱期に敵国だった日本の子どもを育ててくれた養父母たちへの恩返しです」と話す。そして「中国の養父母への感謝と、帰国者の55%は親が見つからないまま悪戦苦闘している現実とを日本社会は忘れないでほしい」としめくくった。